

政治は他人事か

坂田 萌音

若者や現役世代の投票率の低さは選挙のたびに話題となっています。ある意味では政治のことを考えずに政治家へ丸投げしても問題なく生活できているという平和の現れでもあるのですが、その人たちは本当に現状の政治に満足しているのでしょうか。おそらくそうではなく、「よくわからない」「結局どこに投票しても変わらない」「自分の1票くらい別に関係ない」と諦めや他人事のようになっているのではないのでしょうか。

実際私も少し前まではそうでした。初めての選挙は親に連れられて政策は何も知らないけれどとりあえず聞いたことのある政党の候補者に投票をしました。実家を離れてからは選挙にも参加せず無関心で、当時は政策をチラッと見ても自分に関係があるように思えずに考えることを放棄していました。そこから興味を持つきっかけとして考えられるのが物価高や保険料や税金の引き上げなどの実質賃金の低下から自分の生活に問題が入り込んできたことだと思います。無関心でいられる、現状に甘えて生きていける時期が終わったのです。

皆さんの頭を悩ませている問題に政治は無関係でしょうか。諦めて傍観しているだけの人に文句を言う資格はあるのでしょうか。その不満や希望の意思表示をできるのが有権者である我々の1票なのではないのでしょうか。

わからないから選挙に行かないのではなく、選挙に行こうとしないから調べることなくわからないままになってしまいます。2013年に公職選挙法が改正され、インターネットを利用した選挙運動が可能となりました。それまでは新聞や街頭演説などで情報を集めていたのが今は気軽にインターネットで調べられるようになりました。知りたい情報が得られる反面、居眠りをしたり、弁論中に過度なヤジを飛ばしたりする政治家など見たくないものも見えてしまいます。便利になる一方で、悪いものばかりが目立ち、拡散されるインターネットの海にずっと触れていると諦めが強くなってしまうのも少しわかるような気がします。しかし、見て見ぬふりをして無関心のままでいいのか、今一度考えていただきたい。

「シルバー民主主義」という言葉を聞いたことがある方もいるのではないのでしょうか。高齢者の人口や投票率が高く、若者の投票率が低いことが原因で、高齢者優遇の政治が重視され、若年層、現役世代の意見が反映されにくい状態の政治です。有権者の高齢化が深刻な今の日本で若者の意見を反映させるにも、一人一票の選挙制度自体が世代間の公平性を維持できていないと考えています。しかしながら、その主張をするためにもまず選挙に参加しない世代の意

見に耳を傾けてくれるような人はいるのでしょうか。投票率の高い関心を持って意見を伝えてくれる世代に寄り添った政策を掲げるのは至極当然のように思います。しかし、先ほども述べましたが、物価高や実質賃金の低下などは現役世代だからこそより悩まされているのではないのでしょうか。このまま無関心を続けても待っているのは現状通り若者の負担が大きくなっていきます。この先さらに次の世代にそのツケが回っていくのです。それでも「関係ない」「わからないからいいや」と諦めて無関心のまま参加しないでいいのでしょうか。

私たち有権者がまず初めにできる政治への参加が選挙に行き投票することです。私と同じように昨今の社会情勢から他人事ではいられないと感じている方もいらっしゃると思います。その些細なきっかけから選挙に行くと言う行動に移すことであなたの意志や考えの表明ができます。どうせみんな行かないから、ではありません。却って選挙に行く人が増えていると聞いたら自分も行かないとまずいのかなと焦って投票に行く人が増えるかもしれません。小さな一票も集まったら大きな力になります。その小さいかもしれない一歩を皆さんでそれぞれ踏み出してみませんか。行動に移すことできっと未来は変えていきます。